

博士學位論文

内容の要旨

および

審査結果の要旨

甲第49号

2006

創価大学

本号は学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号)第8条の規程による公表を目的として、平成19年3月20日に本学において博士の学位を授与した者の論文内容の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

学位番号に付した甲は、学位規則第4条2項(いわゆる課程博士)によるものである。

創価大学

氏名（本籍）	中堀 正洋（京都府）
学位の種類	博士（英文学）
学位記番号	甲第49号
学位授与の日付	平成19年3月20日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 創価大学大学院学則第17条第2項 創価大学学位規則第3条の3第1項該当
論文題目	ロシア葬礼泣き歌における詩的表象の考察 I. A. フェドソーヴァの葬礼泣き歌を中心に
論文審査機関	文学研究科委員会
論文審査委員	主査 栗原 成郎 文学研究科教授 委員 佐藤 純一 文学研究科教授 委員 藤沼 貴 文学研究科教授

学位請求論文審査および最終試験報告書

学位：博士（英文学）

平成 19 年 1 月 17 日

主査 栗原 成郎 文学部教授
副査 佐藤 純一 文学部教授
副査 藤沼 貴 文学部教授

論文提出者

氏 名 中堀 正洋（なかほり・まさひろ）
生年月日 昭和 48 年 3 月 17 日（33 歳）

論文題目

ロシア葬礼泣き歌における詩的表象の考察 I.A.フェドソフの葬礼泣き歌を中心に

[論文内容の要旨]

ロシアにおける伝統的な葬送儀礼は哀泣と泣き歌をともなったものであり、その死者儀礼の基盤は有史以前の氏族社会にさかのぼる、と考えられる。死者を「哀悼する」[追悼する]ことをロシア語で плакать プラカ「泣く」を語根とする動詞で оплакивать オプラキヴァチ（不完了体）／оплакать オプラカチ（完了体）と言うが、それは「悲しい」という感情の自然な発露として「泣く」のではなくて一定の儀礼をともなって歌謡の形態で「慟哭する」ことを意味した。死者は儀礼をもって泣いてもらう、すなわち泣き歌をうたって見送ってもらわなければ、死者たちの国へ、祖先の憩う所へ旅立つことはできない、と信じられた。ロシアではキリスト教受容（988 年）後もあらゆる儀礼のうちで古代異教の残滓を最も色濃く保持してきたのは葬送・埋葬・追善等の死者儀礼である。

死者にたいする生者の態度は二面性をもつ。生者は、一方においては、死者を恐れ、死者の帰還にたいして呪術的な防御策を講じ、他方においては、死者を慰撫し、宥和し、称讃し、供え物をささげて敬い、好意を得ようと努め、死者に援助を乞い、家族を忘れないように訪問し、護ってくれるように頼む。このように矛盾した二面性は葬送儀礼に保たれており、また葬礼泣き歌にも濃厚に反映されている。

ロシアにおいては葬礼泣き歌 причитание は口承文芸（フォークロア）の一つのジャンル儀礼歌 обрядовая поэзия に属する作品として採録されている。

本論文は、ロシア本国においてソヴィエト時代には無神論的視座から無視され、日本においてはほとんど顧みられることのなかった語詞芸術としての葬礼泣き歌にあらわれた詩的表象の象徴的意味総体とその特異性を考察した画期的研究である。論文の規模は全体で A4 紙型 3 2 2 ページ、4 0 0 字詰め原稿用紙に換算すれば約 8 5 0 枚である。

論文は序論、本論 5 章、本文解釈（テキストの翻訳と訳注）、英文レジュメから成る。

序論

古今東西の世界文学のなかで「泣き歌」が知られている文化領域がどのような広がり分布を示すかを概観しつつ、口承文芸の詩的作品としてのロシアの葬礼泣き歌の伝承と芸術的特異性を強調しようと試みた。ロシアでは葬礼泣き歌の担い手は女性である。口承文芸としての葬礼泣き歌はもはや死せる芸術ではあるが、19世紀末の天才的泣き女イリーナ・フェドソーヴァ（1831-1899）の泣き歌がパールソフ（1836-1917）によってロシア北部で採録されてから、その歌詞テキストのもつ詩的イメージの芸術性が詩人ネクラソフや作家ゴーリキイらによって注目されるようになった。

葬礼泣き歌はなによりもまず即興性という性質により他のフォークロア・ジャンルと異なる。そこには人の死というつねに現実的・具体的な出来事のディテール、特定の人の性格が含まれる。泣き女は遺族の悲しみの解釈者・理解者となり、遺族の心情を追体験しつつ哀泣をもって代弁する。葬礼泣き歌はその内容から抒情的性格をもつとともに故人の人生を語る叙事詩的側面を有し、特にフェドソーヴァの歌がそうであるように、時に長大な歌詞テキストを構成する。人の死という現実的な状況に即してふつう葬礼泣き歌は哀泣から号泣へと転調するが、その歌の基本的な部分は伝承であり、泣き女はその反復の技術を母や祖母から習う。

葬礼泣き歌の詩的技法は比喩の多用による情緒表現を最大の特徴とする。「死」を擬人化し、「柩」を「家」に譬える。このような「死」に関わる現象の詩的表出を論者は本論を5章に分けて論考する。

第1章 フェドソーヴァの生涯

葬礼泣き歌はロシアの農民の労働と生活習慣と不可分に結びついている。そのためにはまず論者は天才的泣き女と謳われたイリーナ・フェドソーヴァを辿らなければならない。フェドソーヴァの伝記に関する研究はK.チストーフの『イリーナ・アンドレエヴナ・フェドソーヴァ — 文化史的概観』が唯一の基本文献であるので論者はそれに依拠してフェドソーヴァの人生の足跡をたどり、彼女の「泣き歌」がパールソフによってテキスト化された過程と彼の『パールソフ収集によるロシア北部地方の泣き歌集』（1872）が当時のロシア社会に与えた影響を叙述し、このパールソフの『泣き歌集』が質量ともに最良のテキストを提示していることを指摘した。

第2章 「日没」あるいは「飛翔」の意味論

フェドソーヴァの葬礼泣き歌では故人を「太陽」や「希望」に譬えるメタファーが多用される。葬礼泣き歌において「あの世」がどこに位置するかを他の口承文芸資料や記述文学の表現と比較考察したうえで、フェドソーヴァの用例から「あの世」が「高い山の彼方」「森の奥深く」「雲よりも高い天空」「東の方角」「星のかなた」「深い峡谷の彼方」「母なる湿れる大地」「深い穴蔵」「青く深き海の彼方」「月の出る方角」などに位置することを例証し、死者が彼岸に向かうことを意味する「日没」と「飛翔」という二つの機能と意味を考察した。ロシア北部のような僻地の農村においては、その複雑な家父長制家族の関係や古

来の慣習法から、家長の死後、夫を失った寡婦と父親を奪われた子供が非常に不安定な状況に追い込まれることを示し、一家の大黒柱は家族にとって「希望」「太陽」として象徴され、その死を「日没」になぞらえる隠喩が葬礼泣き歌においては常套手段であることを確認した。

また葬礼泣き歌においては故人が「鳥」と比喻され、「あの世」へと飛び去ること、あるいは「あの世」から「この世」へと舞い戻るよう呼びかけられることを用例から示し、「鳥」と「飛翔」のモチーフの密接な関係から死者の「旅立ち」と「帰還」の両者が象徴されている、と述べる。

第3章 葬礼泣き歌における「道」の意味論

「この世」から「あの世」へと去り行く死者の旅路がどのようなものであるかが考察される。V.チスチャコフは「19-20世紀のロシア葬礼泣き歌におけるあの世への道の観念」と題する論文のなかで、「道」の表象を構成する十の要素、①死者の新たな住まいとしての墓、②どこへ旅立つのかという死者への問いかけ、③死者が旅立つ「嘘の理由付け」、④あの世への移動方法、⑤死者の旅立ちの際の外観、⑥死と婚礼を同義とする表象、⑦あの世がどこにあるのかの確認、⑧あの世からの死者の帰還、⑩死者が帰還する際の外観、を分類提示した。

しかし論者は、これらの要素を同じレベルで分類するのは粗忽である、と批判し、「道」の基本要素を四つからなる大枠、①旅立ち、②「あの世」への道程、③「あの世」からの死者の帰還、④世界樹 — 垂直軸と水平軸、に分類し直して考察する。

論者は、葬礼泣き歌では、死者の旅立ちに際し、修辞疑問という伝統的表現手法によって死者に「どこへ」という問いかけが繰り返し行われること、また死者は生前と変わらぬ普段の生活を続けるかのようにうたわれる一方、「あの世」つまり抽象的な遥かな世界への旅立ちとしてうたわれることを用例から明らかにした。そして旅路が日常から非日常へ、現実から非現実の世界への越境行為であることを指摘し、それらの表現が一方で「この世」における物理的な移動として表象されながら、他方で死者の肉体の滅亡としてだけでなく、変容を伴った質的に異なる空間への移行として表象されることを論じた。

その際、旅路は一方で身近な場所への容易い道程であるとともに、他方で遥か彼方への非常に険しく、困難な道程となることを用例に即して示し、その道程の困難さと遠大さによって、時間的な長大さを表現していることにも言及した。

また死者が鳥となり「ヴィーレイ」と呼ばれる彼方へ飛び去るという泣き歌の用例から、地下・地上・天上を貫く「世界樹（宇宙樹）」とそれとの関連性を示し、中世文学作品や語源学、口承文芸などの資料から世界樹に関する考察を行い、「イーレイ＝ブヤーンの島＝墓地」という概念を打ち出した。そこから、泣き歌において世界樹が三層の世界を貫く垂直軸として「天上（天国）」への「道」となるとともに、水平軸として「地上の楽園（あの世）」への「道」となることを論究した。

さらに泣き歌における死者の帰還という呼びかけは、遠く険しい「道」を通らずとも舞い戻れるよう、鳥の飛翔能力や、兎や鼯の跳躍能力に願いを託した親族の切なる表現であると考え、泣き歌における「道」は死者と生者、彼岸と此岸をつなぐ唯一の手段であった

ことを論述した。

第4章 葬礼泣き歌に現れる「鳥」の意味論

一般に泣き歌では、呼びかけとして口承文芸に常套的な比喩表現が多用されるが、フェドソーヴァの葬礼泣き歌にも例外なくそれが用いられている。フェドソーヴァの泣き歌に現れる鳥は、論者が確認した限り、白鳥、鳩、鷹、燕、大鴉、小夜啼鳥、鷺、郭公、鴨、家燕、鷺鳥、鴉、黒丸鴉、鶺鴒、雀、火の鳥と十六種類にも上るが、第4章では呼びかけではないと考えられる比喩表現に焦点を当て、鳩、小夜啼鳥、大鴉の機能と意味を論考した。

論者は、様々な民俗資料や記述文学を比較検討し、鳩、小夜啼鳥、大鴉が「あの世」と密接な関わりを持っていることを明示したうえで、比喩表現におけるこれらの鳥が泣き歌のなかで様々な役割を果たすことを論じている。さらにフェドソーヴァの泣き歌と他のそれとを比較考察した結果、フェドソーヴァは比喩する対象によって、比喩表現に用いる語彙のイメージから名詞の性や方言的指小形の峻別を行っていると考え、作品中に一定の規範を設けた彼女特有の表現が存在するとの仮説を提示した。

第5章 葬礼泣き歌に現れる「家」の意味論

死者の魂は死後も墓あるいは墓の側に建てられた「家」で生き続けると考えられるが、泣き歌に現れる「家」も死者の住処としてうたわれるなど多用な意味を持って表象される。第5章では、論者はL.ネーフスカヤの論文「葬礼における家とそれに関連する観念の意味論」を参照し、「イズバーизба」と呼ばれる百姓家に焦点をあて、小宇宙をモデルとした象徴的構造を成すイズバーの構成要素「門」、「表階段」、「戸口（扉）」、「土間」、「窓」を二項対立の視点から考察した。

これらの要素は泣き歌のなかで様々な機能を果たしているが、フェドソーヴァの泣き歌と他のそれらとを比較検討し、多くの用例を挙げながら、既述の構成要素が開かれた状態の時には外部からの来訪者あるいは異界からの侵入者を招き入れることを、閉じられた状態の時には境界の侵犯者、つまり擬人化された「死」からの防御を主として象徴していることを明示し、それらの要素が内的空間と外的空間を隔てる境界として機能していることを論究した。さらに、論者はネーフスカヤが指摘していない幾つかの問題点を挙げ、これらの要素が「天国」あるいは「地下」といった異界への入り口となること、これらの要素を跨いだ行為が境界の均衡を破壊する故に、不幸をもたらす結果となることを指摘した。

結語

結語において論者は、各章において考察した対象の機能や意味についてまとめ、フェドソーヴァの葬礼泣き歌が19世紀後半の村社会の状況を色濃く反映し、様々な詩的イメージやフォークロア的なモチーフを組み込んでいる点、そして他の葬礼泣き歌の作品が短いものでは10行程度であるのに比べ、彼女の葬礼泣き歌は短いものでも平均して300行程度あり、長いものでは1200行を越える点から、他の一連の葬礼泣き歌作品と一線を画している点を強調した。

[論文審査の要旨]

I 当該論文のテーマ

ロシア葬礼泣き歌の研究は口承文芸論という微視的視点から観ても決して小さなテーマではなく、葬制を射程内に入れた民俗学や文化人類学あるいは民族音楽学のような巨視的視座からすれば、さらに重量が加わるテーマである。ロシアの葬礼泣き歌は口承文芸の「儀礼歌」のジャンルに属する民衆詩歌の作品であることを特徴とする。論文提出者はこの口承文芸の作品としての葬礼泣き歌に焦点を絞り、人間の死という現実的な状況に臨んで泣きながらうたわれる民衆詩的哀歌の歌詞テキストにおいて「故人」「別離」「あの世」「旅立ち」「道」がどのように表象され、比喩表現となって結晶されているかを考察した。葬礼泣き歌は口頭伝承による伝統的語詞表現の反復定式を備えているが、具体的な葬儀の場面に応じて臨機にうたわれる即興詞であるので、そこに歌い手の才能と独創性が発揮される。論者は、19世紀末に採録された泣き女イリーナ・フェドソーヴァの歌詞テキストを中心に葬礼泣き歌にあらわれた詩的表象の解明を試みた。ロシアの葬礼泣き歌に関しての先行研究としては西欧ではスイスの女性研究者マーラーの論考（E. Mahler. *Die russische Totenklage: Ihre rituelle und dichterische Deutung mit besonderer Berücksichtigung des grossrussischen Nordens*. Leipzig, 1936）が世界的水準に達した唯一の成果であり、わが国においては啓蒙的かつ周辺的な論説が若干見られるのみであるので、当該論文はロシア葬礼泣き歌を直接の対象とした日本で最初の本格的な研究である。

II 研究の本体

論文提出者は当該テーマに関する基本的な資料はすべて収集し、先行研究にもよく目を通しており、文献の渉猟において手落ちはない。泣き女イリーナ・フェドソーヴァの言語はロシア北部カレリア地方のロシア語方言である。その方言はロシア語の標準文語とは程遠く、発音・語彙・語形・語法においてロシア語標準文語の規範からの逸脱が甚だしい。したがって、その方言テキストを読みこなす作業が研究の第一条件となる。そのテキストにはいわゆる *Hapax legomenon*（資料の中でただ一度しか用いられていない語・語句）や意味不明の語・語句が少なからずあるので、解読は決して楽な作業ではない。論者は各種の方言辞典、方言研究書を丹念に調べて読解に努め、その成果は論文中の「本文解釈」にあらわれている。論者はフェドソーヴァの葬礼泣き歌のテキストをすべて翻訳・解釈しているが、本論文には、規模を考慮に入れて、主要作品6篇のみを収録している。本文解釈は論述部分ではないが、*philology*（語学文学研究）においてはその根幹を成す重要な部分である、と言える。ただし、本文解釈である以上はテキストの細部にまでわたる語彙・語形・語法に関する詳細な語学的注釈が必要とされるが、その部分が省略されている点が惜しまれる。近い将来、テキストに関して緻密な語学的注釈を施す作業が求められる。

翻訳に関して言えば、原文をあまりにも忠実に訳出しようとしたために、語順、同義語反復、指小辞、枕詞に対応する日本語がぎこちなく、誤解さえ生みやすい箇所が少なくない。その点、再検討を要す。

本論部分では「飛翔」「日没」「道」「鳥」「家」というキーワードのもつ「シンヴォリカ

символика」(象徴的意味総体)が論考されているが、論者が用いている「意味論」は「セマンティカ семантика」(semantics)ではなくて、ロシア語の「シンヴォリカ СИМВОЛИКА」に相当する概念であり、言語学の一分野としての「意味論」とは異なるので、その使用法も再考を要する。

本論部分中最も優れた部分は第3章の葬礼泣き歌に現れる「道」の意味論である、というのが審査員一同の一致した評価である。ロシアにおける最近のフォークロア研究に発想の糸口を見出し、それを批判的に検討して独自性を打ち出そうとした努力の跡が見られる。

第4章の「鳥」の意味論に関しては「平板」との評価も下されたが、論文提出者自身としては最も関心をもっている領域であり、既に学会での口頭発表や論文の業績がある。

- ① 学会発表「И.А.フェドソーヴァの葬礼泣き歌にあらわれる鳥のイメージとその機能について—鳩と小夜啼鳥を中心に—」平成15年11月5日、日本ロシア文学会第53回総会
- ② 論文「И.А.フェドソーヴァの葬礼泣き歌に現れる鳥の表象について—鳩と小夜啼鳥を中心に—」創価大学大学院紀要第26集 147—163頁、平成17年2月11日
- ③ 論文「スラヴの鴉について」『なろうど』50号、30—37頁、一橋大学坂内研究室、平成17年3月15日

なお、以上のほかに科研費グループ「国際比較神話学組織」(代表：篠田知和基 広島市立大学教授)編集の審査つき論文集に当該研究の一部が掲載された。

- ④ 論文「ロシア葬礼泣き歌における道の意味論—フェドソーヴァの葬礼泣き歌を中心に—」篠田知和基編『神話・象徴・文化』27—52頁、楽浪書院、平成18年5月

なお本論では触れていないが、論者は既にフェドソーヴァの葬礼泣き歌における前置詞の反復に関する問題を発表しているので(「フェドソーヴァの葬礼泣き歌における前置詞の反復について」、ロシア・フォークロア研究会、ロシア・フォークロア研究通算第9号)、論者による当該の研究が、本論脱稿後の現在も考察中の葬礼泣き歌作品に現れるモチーフや定型的な表現(常套句)の分類、特定の語に付される形容辞に関する問題などを含めて、更に包括的・総合的な研究へと発展するものと期待される。

以上の観点から、中堀正洋氏提出の学位請求論文は博士(英文学)の学位を取得するに相応しい論文である、と審査委員は判断した。

[最終試験の結果]

I 平成18年12月8日(金)16時40分より17時50分まで文系C棟1階会議室において公開審査を兼ねた公开发表会が開催された。学位請求者の研究発表後、ロシア語専攻の各教員をはじめ、石神豊教授、宮井捷二教授からも研究の独自性・独創性を問う質問が提出されたが、発表者はいずれの質疑に対しても落ち着いて明確に答えた。

II 公開発表会に引き続いて、同日18時から20時まで2時間にわたって論文の細部に関わる質疑応答が行われた。

戦前の中国における泣き歌をともなう葬儀を目撃した藤沼教授からは、実際の葬礼泣き歌は極めて激烈な動作・慟哭をともなう劇的なものであったが、論者の葬礼泣き歌解釈は具体的な場面が捨象されて、抽象化され過ぎてはいないかとの意見が出された。実際の葬儀はフィールド・ワークにおいても観察できる機会は極めて少なく、従って外国人が研究する限り、公刊テキストにのみ依拠せざるをえないためにそのような印象を与えたものと答えた。また、フェドソーヴァが職業的な泣き女だったのか否か、彼女がどういう身分の農民だったのか、すなわち農奴だったのか自由農民だったのかについても質問が出された。その点についてはチストフによる唯一の詳細なフェドソーヴァについての評伝にも記載はないが、フェドソーヴァが村コミュニティ全体に関わる泣き歌の歌い手であったことは確かであると答弁がなされた。葬礼泣き歌が単なる плач ではなく причтание と呼ばれる以上、フェドソーヴァが語り部の役割を果たした泣き女であったのではないか、という意見が出され、フェドソーヴァの泣き歌が語り部としての叙事詩的側面を持っていたことが確認された。

なお佐藤教授からはテキストの細部についての異議が提出されたが、的確な答弁がなされた。個々の誤植も指摘されたが、誤植は直ちに修正されることとなった。

以上を総括して、審査委員は一致して学位請求者中堀正洋氏の最終試験を合格とし、論文審査と合わせて、同氏に博士（英文学）の学位を授与することが適切であるとの結論に達した。